

初めからのことを思い出すな。昔のことを思いめぐらすな。
見よ、新しいことをわたしは行う。今や、それは芽生えている。
あなたたちはそれを悟らないのか。
わたしは荒れ野に道を敷き 砂漠に大河を流れさせる。

(イザヤ書43章18節、19節)

コロナに明けコロナに暮れた2020年が終わり、新しい年を迎えました。微小なウィルスが、これほどまでに大きく私たちの生活を変えると誰が想像し得たでしょう。

聖書の中では、荒れ野や砂漠は厳しい不毛の環境であり、人生の苦難や試練を象徴するものとして使われることが多くあります。コロナ禍の2020年は、多くの人たちにとって、まさに荒れ野や砂漠を通るような苦難の年であったのではないのでしょうか。

アメリカの起業家であり、作家、芸術家としても活躍しておられるルー・ス・チョウ・シモンズ (Ruth Chou Simons) 氏が、幼い頃の経験を記しておられます (Our Daily Bread 2020 September to November)。ニューメキシコ州で過ごした子ども時代、お父さんに連れられて家族でドライブに出かける折、車が砂漠を通って走る間、目を閉じて眠るようにしていたそうです。果てしなく続く荒野、乾いた灼熱の不毛の大地。シモンズ氏にとって、砂漠はできれば避けたい場所、そこにいることを実感したくない場所であったそうです。

人生においても、砂漠のような、苦しく不毛に思える時期は訪れます。しかし、人生においては、眠っていてそれを見ないようにすることはできません。心傷つく人間関係、苛立たしい状況、終わりの見えない困難。コロナ禍の今、砂漠のような状況を経験させられている人はたくさんいるのではないのでしょうか。

しかし、冒頭の聖書箇所に記載されている通り、神様は「荒れ野に道を敷き 砂漠に大河を流れさせる」と約束してくださっています。道のない荒れ野に、私たちが安全に歩ける道を造り、水のない砂漠に、豊富な水を湛えた大きな川を流れさせる、と約束してくださっているのです。

シモンズ氏は、幼い頃の経験から、ちゃんと目を開いていれば、実際には砂漠にも美しい景色が広がっている、と語っておられます。人生の砂漠においてもそうである、だから、目を閉じないで、と。

目を閉ざすまでは行かなくても、苦しい時には、その苦しみにしか目が行かず、それがいつまでも続くかのように錯覚してしまうのが私たち人間の弱さです。試練や困難の真只中にも与えられる喜びや希望に目を留めて感謝しつつ、試練の先に備えられている大きな祝福を待ち望んで、この困難な時期を過ごして行きたいものです。

先の見通せないこの時期に、大切な受験期を迎える皆さんは、不安でいっぱいだろうと思います。私は毎年、生徒の進路開拓のために祈っています。その祈りは、難関大学にたくさんの生徒が合格するように、という祈りではなく、一人ひとりにとって最も相応しい進路が開かれるように、という祈りです。確かに、進学実績が上がれば、進学校として学校の評価は上がります。また、より上のレベルを目指すという向上心は、生徒にとって大切なものです。しかし、清教学園は、一人ひとりの賜物を生かすことを校是としています。難関大学に進学して学ぶことよりも、その生徒の賜物をもっと生かされる道があるならば、その進路が開かれるようにと祈ります。一人ひとりの生徒が、生き生きと100%の自分を生きることのできる人生を歩んでくれることが清教学園の願いであるからです。

本校を目指して受験勉強に励んでくださっている小・中学生の皆さんのためにも祈ります。不安定な状況が続く時期、勉強に集中することはたいへんだろうと思いますが、健康に留意し、与えられた環境の中で、その日その日にできることにベストを尽くして頑張ってください。本校に入学し、本校で学ぶことで、最も輝くことのできる、そんな人たちが選ばれて本校の生徒となり、共に充実した学園生活を送ることができるよう、心から祈っています。